

IIAS 「ゲーテの会」ブックレット  
(VOL. 01083)

「新しい文明」の萌芽を探る  
ー日本と世界の歴史の転換点で、転軸機を動かした「先覚者」の事跡をたどるー

(政治・経済分野)

should の世界と how to の世界を問う。

統治理論の探求者

『ニッコロ・マキアヴェッリ』

公益財団法人国際高等研究所  
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

本ブックレットは、2020年11月5日開催の第83回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※本ブックレットの無断転載・複写を禁じます。ただし、個人としてのご利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

## 「新しい文明」の萌芽を探る

ー日本と世界の歴史の転換点で、転軸機を動かした「先覚者」の事跡をたどるー

# should の世界と how to の世界を問う。 統治理論の探求者 『ニッコロ・マキアヴェッリ』

タイトルに二つの英単語を置いたのは、宗教（倫理の世界）と方途（道徳の世界）をわかりやすく説くため、その個所を『君主論』から引用して解説。以後の引用は原典イタリア語とペンギン版英訳、それに参考図書で挙げている翻訳書の3種類を用いて熟読してゆく。また、著名な「目的のためには手段を選ばず」の信憑性を『君主論』のなかで確認する。さらにマキアヴェッリが理想とした「市民型の君主制」について歴史的観点から考えてみる。最後に、古典古代（異教の世界）崇拝者だったマキアヴェッリにとって宗教とは何であったかを問うとともに、マキアヴェッリとは正反対の立ち位置で社会を見つめたジョヴァンニ・ボテロにも言及できればと願っている。

（ニッコロ・マキアヴェッリ：1469～1528 年）

（ジョヴァンニ・ボテロ：1544～1617 年）

### 澤井 繁男（Shigeo SAWAI）

1954 年札幌市生。道立札幌南高校から東京外国語大学伊語科を経て、京都大学大学院文学研究科博士課程満期退学。東外大論文博士（学術・1999 年）。4 半世紀大手予備学校で英語の教鞭を執って、2004 年関西大学文学部教授に就任（2019 年 3 月末日を以て定年退職）。放送大学（大阪）の非常勤講師。専門はイタリアルネサンス文学・文化論。小説家としても商業誌で活躍。マキアヴェッリ関連書には、『マキアヴェッリ、イタリアを憂う』（講談社）、バウズマ著（拙訳）『ルネサンスの秋』（みすず書房）、『若きマキアヴェッリ』（東京新聞社）、『外務官僚マキアヴェッリ』（未知谷）、『助教 横田弘道・ダヴィデ像』（水声社）。その他のイタリアルネサンス関連書、創作集他多数。



## 目次

はじめに

- (1) 『君主論』とは
- (2) 統治理論の探求者
- (3) 翻訳の問題

I 『君主論』第15章 冒頭近く

- (1) should と how to の世界を意識したマキアヴェッリ
- (2) 第1章から類推される政体分類、及び『君主論』の全体構成
- (3) 『君主論』と同時代の文化的遺産

II 第18章 後半「宗教に『毒』をみる」

- (1) 君主に求められる五つの特質
- (2) 信仰と宗教
- (3) イタリア戦争を通して見るイタリアの歴史

III 第18章 末尾「目的は手段を正当化する」

- (1) 翻訳によって作られた言葉

IV 第9章 後半「市民型の君主国」

質疑応答

2020年11月5日開催

第83回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：shouldの世界とhow toの世界を問う。

統治理論の探求者『ニッコロ・マキアヴェッリ』

講演者：澤井 繁男（作家、元 関西大学文学部教授）

(文中敬称略)

はじめに

### (1)『君主論』とは

本日は、ニッコロ・マキアヴェッリについてお話しするが、この人は官僚で、フィレンツェ共和国の第二書記官長という地位にあり、総理大臣（『正義の旗手』）に当たる人の右腕だった。ところが、あまりにも辣腕を振った人だったので、メディチ家から追放されてしまう。彼は役人なので、トップが変わっても自分の地位は変わらないと思っていたが、敏腕だったために追放され、職を失ってしまう。

1512年にメディチ家がフィレンツェに復帰した時、マキアヴェッリは、今度はメディチ家に仕えたいと思い、就職論文を書く。それが、本日取り上げる『君主論』である。つまり、『君主論』はメディチ家仕官のための論文であり、立派な書籍ではなく、わずか26章でできている小さな本である。

ところが、この本をメディチ家に献呈したものの、なかなか読んでもらえず、マキアヴェッリは諦めてフィレンツェ郊外の故郷に隠棲してしまい、そこで執筆生活を送った。それが1513年或いは、1514年頃からマキアヴェッリが死ぬ1528年くらいまでの約14年間続いた。それで、死ぬ3~4年前にやっとメディチ家に抱えられ、『フィレンツェ史』という歴史書を書くように言われるが、これは未完で終わってしまう。

そういうわけで、本日はマキアヴェッリ自身の仕官願望の書を皆さんと読んでいくことになるが、仕官希望の書であるからといって、マキアヴェッリを『君主論』の段階で政治家とか政治思想家とは言えない。よくマキアヴェッリは政治思想家と紹介されるが、マキアヴェッリの政治思想は『君主論』の後の作品を分析した時に出てくる。彼はあくまで人文主義者である。

『君主論』は、「目的のためには手段を選ばず」というようなことをマキアヴェッリが書いた本として有名であるが実際は違う。原典のイタリア語、英訳、池田廉<sup>きよし</sup>氏の日本語訳の



マキアヴェッリの肖像  
(クリストファノ・デル・アルティシモ画)  
Public domain, via Wikimedia Commons

三つを揃えて四つの問いかけを分析すると、マキアヴェッリがどこにおいても、マキアヴェリズムと言われる「目的のためには手段を選ばず」のような権謀術数と言われる言葉を述べていないことが分かる。

今の菅総理がマキアヴェッリのファンらしいが、多分、彼はそれを知らない。田中角栄元総理大臣もそうだったそうだが、多分知らなかったと思う。それを暴いていく。

## (2) 統治理論の探求者

本日の話は第 15 章から始まる。タイトルは「should の世界と how to の世界を問う」でマキアヴェッリを「統治理論の探求者」と位置づけている。

「should の世界」とは「～であるべき」という倫理の世界である。言い換えると、イコールとは言えないが、宗教の「いかによく生きるべきか」ということ、キリスト教であれば「いかに善く生きて、天国に向かえるか」ということである。

それに対して、「how to の世界」は方法を意味する。例えば「生命倫理」とは言うが、「生命道德」とは言わない。「交通道德」とは言うが、「交通倫理」とは言わない。つまり、倫理はあるべき姿で、道德は how to である。つまり、「交通道德」とはいかに車が衝突せず、赤信号で止まるかということを書いた how to のことである。moral の原語のラテン語は mos(モース)で「方法」という意味であるから、should は宗教、倫理、how to は道德、方法の世界を問うということになる。マキアヴェッリはこの should の世界と how to の世界、つまり倫理の世界と方法の世界を分けることを初めて成し遂げた人なのである。

「統治理論の探求者」というのは、マキアヴェッリが失脚した後、1513 年～1515 年の間にフィレンツェのローマ教皇庁の大使だったフランチェスコ・ヴェットーリとの間でやり取りされた往復書簡による。これはとても大事な書簡である。

『君主論』は 1513 年頃に完成するが、マキアヴェッリは書簡でヴェットーリに『君主論』を書くモチーフについて「arte dello stato」と言っている。arte は英語の art、dello は of、stato は state だが、このイタリア語の stato はとても難しく、フィレンツェの場合は「メディチ家統治の国」という意味がある。また、本来的な意味での「国」という意味があるし、イタリア半島全体に目を通すと、イタリア半島が統一されていた昔のローマ帝国の時代という意味もある。ここはマキアヴェッリがメディチ家の仕官のためにこの本を書いているので、この stato はメディチ家が治めていたフィレンツェ共和国を指しているが、この場合、マキアヴェッリは統治という意味で使っている。つまり「統治の術を書くために、私はこの『君主論』を執筆する」という趣旨の手紙をヴェットーリに送っているわけである。

政治はどうなっているかという、イタリア語で「政治」は politica と言うが、『君主論』の中にこの politica という単語は一度も出てこない。これはギリシャの polis につながり「市民」につながる単語なので「arte dello stato」＝統治の術という言葉とは違い、『君主論』の

中には出てこないのである。つまり、『君主論』はあくまで、戻ってきたメディチ家がフィレンツェという地域をどのように治めたら良いかということを書いた本を指す。それで、マキアヴェッリは、「そのためには宗教を世俗の世界から離して考えなければならない」とヴェットーリ宛の書簡にも述べている。『君主論』の第 15 章の冒頭近くにこの文章が出ていて、これを私は政教分離と位置づけているが、この場合の「政」は政治よりも世俗に近いという意味であり、「俗教分離」という言葉はないので「政教分離」と書きつつ、政治ではなく、俗世を表している。「教」は宗教である。それで倫理と法になる。

### (3) 翻訳の問題

先に述べたように「目的のために手段を選ばず」という言葉は出てこない。ここから学んでいただきたいのは、翻訳の恐ろしさである。イタリアの文化が日本に入って来て、イタリア語の原典から日本語に訳されたのは昭和 20 年以降であり、それまではほぼ、英訳、仏訳からの二重訳だった。そうすると、そこに 2 度の誤差が生じる。そこで、原典を挙げて、その原典が英語でどう変わるか、そしてそれが日本語でどうなっていくか、それに着目していただきたい。

私は関西大学の文学部で教えていたが、15 年在籍していて、途中で外国語学部ができて、イタリア語の学部はつくられなかった。そのため、学部の学生にはイタリア語で授業ができないので、大学院生にイタリア語を指導しながら、マキアヴェッリなどを読んだ。ここではその大学院の水準で進めたい。大学院生はイタリア語を知らないで、知らない人たちにどのように英語と比較しながら、そして日本語訳も付けてゼミを進めていくかということも兼ね備えながら、読んでいきたい。

皆さんは、関西大学にイタリア語の学科がないなど、信じられないのではないかと。関関同立と言われながら、関西大学にだけないのである。

#### I 『君主論』第 15 章 冒頭近く

##### (1) should と how to の世界を意識したマキアヴェッリ

それでは、第 15 章から下線部を読んでいきたい。

E molti si sono immaginati repubbliche e principati che non si sono mai visti né conosciuti essere in vero: perché elli è tanto discosto da come si vive a come si doverrebbe vivere, che colui che lascia quello che si fa per quello che si doverrebbe fare, impara più tosto la ruina che la perservazione sua: (『君主論』第 15 章冒頭近く)

E は and で「そして」、molti は many、si sono immaginati は「想像されている」という意味である。これを英訳すると they imagine themselves という変な英語になってしまうの

で、別の表現にしたら repubbliche は共和国、principate は君主国、つまり「多くの人たちは共和国と君主国を想像する」という意味になる。che は関係代名詞で、英語の that に相当する。その共和国と君主国というのは non si sono mai visti だが、non~mai で never の意味になる。né は non、conosciuti essere in vero は「本当の存在を知らない」、直訳すると「本当の存在を知らないし、今まで見たこともない共和国と君主国を多くの人たちは想像する」となる。

perché は「なぜなら」という意味で、elli は前の molti を指す三人称の複数形で「多くの人たちは」となる。tanto~che は英語の so~that と同じ、discosto は「離れている」という意味で discosto da A a B は「A と B は別物だ」という意味になる。come は how、doverrebbe は英語の must の条件法になり「多くの人たちは、いかに生きるかということと、いかに生きるべきかはたくさん違うので」、colui che lascia 「無視する人々」、quello は一般的な意味での that で、何を無視するかということと che si fa、fa は英語の make や do、si は people で「人々が作るもの」となる。per は「向かって」の意味なので、つまり「人々が作るものを無視して、作るべきものであるものを尊重する」という意味になる。

ここで言いたいのは、「人間はいかに生きるかということと、いかに生きるべきかということがとても離れている」ということと「いかに今あることと、いかに今『でなければならぬ』かということとを無視してしまう」ということである。現世のことと「であるべき」世界の区別がつかないことをマキアヴェッリは批判しているのである。そして、そういう人たちは impara が「学ぶ」、più tosto ~che が rather than、ruina は「破滅する」の意で、impara più tosto la ruina che la perservazione sua は「そういう人たちは自己を守るよりも破滅してしまうだろう」となる。

これは難しい英語で、マキアヴェッリの英語が読めるとイタリア語が読めるようになると言われるが、とんでもない話で例外がたくさんある。英訳は以下ようになる。

Many have dreamed up republics and principalities which have never in truth been known to exist: the gulf between how one should live and how one does live is so wide that a man who neglects what is actually done for what should be done move towards self-destruction rather than self-preservation.

……これまで多くの人々は現実のさまを見ず、知りもせず、共和国や君主国のことを想像で論じて来た。しかし人が現実には生きていて、人間はいかに生きるべきとは、はなはだ離れている。だから、人間はいかに生きるべきかを見て、現に人が生きていて現実の姿を見逃す人間は、自立するどころか、破滅を思い知られるのである……

(『君主論』第 15 章冒頭近く「政教分離」—「倫理(should)」と「方途(how to)」)

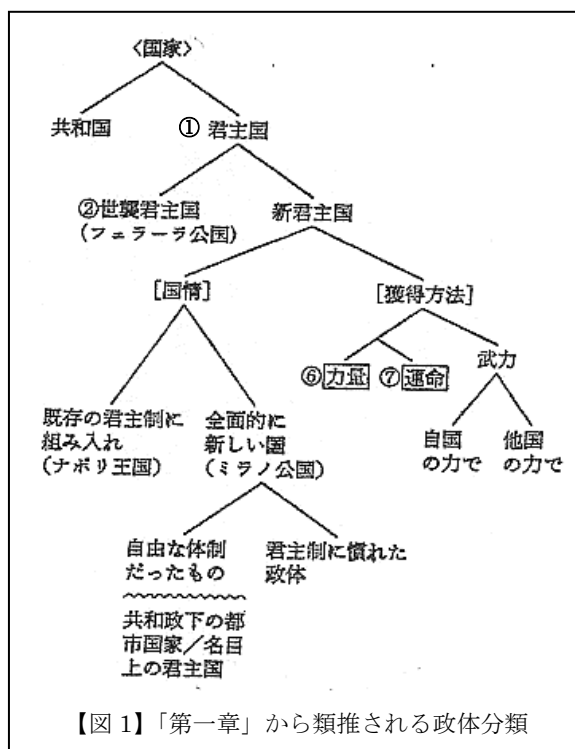


日本語訳は翻訳なので直訳とは少し違うが、「自立」を私は「自己保存」とみなしている。

英語は大丈夫だと思うが、先ほど説明しながら訳したイタリア語とこの日本語に至る落差はお分かりになるだろうか。イタリア語では 2 行目の「che」が関係代名詞で私は repubbliche と principati にかけたが、日本語訳では「現実のさまを見ず、知りもせず、共和国や君主国のことを想像で論じて来た」となっており、「見ず」「せず」というようになっている。ここを形容詞のように「共和国や君主国」にかけると日本語にならない。したがって、これは池田氏のテクニックである。このようにして訳が変わっていく。

ただ、ここまではまだよい。問題はその続きで「しかし人が現実には生きているのと」は現世のことで、現実には人が生きているには方法がある。「人間いかに生きるべき」というのは、キリスト教の世界なので、どのようにして天国に行くべきかということである。これが「はなはだ離れている」と言っているが、マキアヴェッリが言うまでこれを指摘した人はいない。彼は「だから、人間いかに生きるべきかを見て、現に人が生きている現実の姿を見逃すと破滅してしまう」と言っており、明らかに should と how to の世界をマキアヴェッリは意識して書いている。そして、この理論を発展していくと、『君主論』が should の世界ではなく、how to の世界を論じる本であることが、真ん中の章の第 15 章で見えてくるのである。

先ほど紹介したヴェットーリ宛書簡で「統治の術を述べたい」とマキアヴェッリは書き送っている。その他に「君主というテーマで、出来得る限り深く君主像を掘り下げて、君主国とは何かということを書いてみたい」と述べている。



【図 1】「第一章」から類推される政体分類

出典：澤井繁男著『マキアヴェッリ、イタリアを憂う』(講談社)

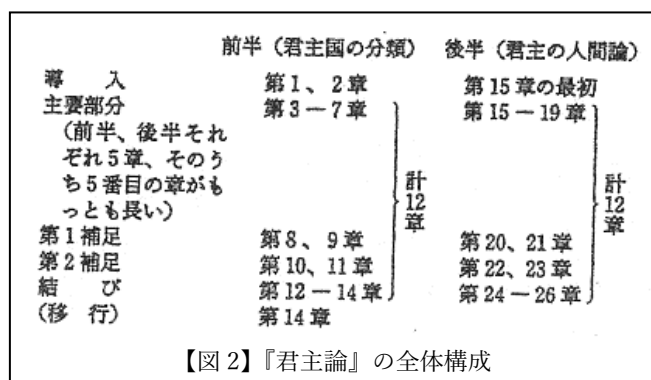
(2) 第 1 章から類推される政体分類、及び『君主論』の全体構成

【図 1】は第 1 章から国の形が分類できる。

まず、一番上に「国」があり、マキアヴェッリはこの本を君主のための本として書いているので、これを「共和国」と「君主国」に分けている。そして「君主国」がそこからまた分かれていく。図に記している①や②は章の番号で、「君主国」から「世襲君主国」と「新君主国」に分かれ、「新君主国」から「国情」と「獲得方法」に分かれ、そこからまだ枝分かれしていく。

つまり、第 1 章は何気なく読んでしまうとすぐに終わってしまうが、マキアヴェッリはその中で緻密に「これから君主の国家について述べていく」ことを示しているのである。

【図2】は『君主論』の全体構成で、前半の12章と後半の12章の組合せを示しており、後半の方が具体的に なっている。



【図2】『君主論』の全体構成

出典：澤井繁男著『マキアヴェリ、イタリアを憂う』（講談社）

### (3) 『君主論』と同時代の文化的遺産

【表1】では、『君主論』と同時代の文化的遺産を紹介している。マキアヴェッリの『君主論』ができたのは1513年で、この前後の時代のヨーロッパの主な文化的遺産としては、ミケランジェロのシスティーナ礼拝堂の天井フレスコ画、エラスムスの『痴愚神礼讃』、トマス・モアの『ユートピア』、アリオストの『狂えるオルランド』、カスティリオーネの『宮廷人』、ルターの『九十五箇条の論題』、マキアヴェッリの『ディスコルシ』がある。

マキアヴェッリの『君主論』がいつ書かれたかについては二つの説がある。一つは、メディチ家を追放される前に『ディスコルシ』で共和制について書いていたが、メディチ家が帰ってきてマキアヴェッリは追放され、仕官しなければならないと思って『君主論』に取り掛かった。そして『君主論』をメディチ家に送ってからもう一度『ディスコルシ』に戻ったという説である。もう一つは、『君主論』を先に書いて、それが終わってから『ディスコルシ』に移ったという説である。これはどちらなのか分からない。それで、ここではマキアヴェッリは『君主論』を書いた後に『ディスコルシ』を書いたという説に従って『ディスコルシ』を最後に置いている。この『ディスコルシ』こそが共和政体について書いた本である。

【表1】『君主論』と同時代の文化的遺産

- ① ミケランジェロのシスティーナ礼拝堂の天井のフレスコ画 (1508-1512年)
- ② エラスムス『痴愚神礼讃』 (1509年)
- ③ マキアヴェッリ『君主論』 (1513年)
- ④ トマス・モア『ユートピア』 (1516年)
- ⑤ アリオスト『狂えるオルランド』 (1516年)
- ⑥ カスティリオーネ『宮廷人』 (1508-1524年、1528年出版)
- ⑦ ルター『九十五箇条の論題』 (1517年)
- ⑧ マキアヴェッリ『ディスコルシ』 (1516-1519年)

## II 第18章 後半「宗教に『毒』をみる」

### (1) 君主に求められる五つの特質

第15章では「倫理(should)」の世界と「方途(how to)」の世界について話したが、次は第18章の後半の「宗教に『毒』をみる」という話である。「宗教は毒だ」と書くと毒になりそうでならないので、宗教を褒め称えて、その逆を考えてくれという手法をマキアヴェッリはとっている。

Debbe, adunque, avere uno principe gran cura che non li esca mai di bocca una cosa che non sia piena delle soprascritte cinque qualità, e paia, a vederlo et udirlo, tutto pietà, tutto fede, tutto integrità, tutto religione. E non è cosa più necessaria a parere di avere che questa ultima qualità.  
(『君主論』第18章後半)

2行目の cinque qualità は cinque が5、qualità は英語の quality なので「五つの特質」となり、良いもの、美德が五つあるということである。それは何かというと、一つは哀れみ深いこと、二つ目は信心深いこと、三つめは人間愛に溢れていること、四つ目は寛大な心を持っていること、五つ目は宗教心があることとし、君主は一般の人たちと話をしている時は、この五つを全部持ち合わせていることを怠らずに示さなければならないと言っている。これはそういう文脈である。

ところが、それをまとめて示さなければならないと言って続く文章では、一つ足りない。3行目の pietà は「哀れみ」で、ミケランジェロに作品があるが、tutto pietà は「あらゆる憐憫の情」を意味する。続く tutto fede は「あらゆる信仰の篤い気持ち」、tutto integrità は「あらゆる寛容さ」、tutto religione は「あらゆる宗教心」となるが、cinque qualità で「五つの特質」としながら、具体的に挙げたら四つしかない。一つ抜けている。cinque qualità の引用文の前に哀れみ、信仰、人間らしさ、寛容さ、宗教心という名詞が出てくるが、ここでの五つ目は引用文の前の文中に記されていて（その文にはきちんと五つが出ている）「宗教心」を指している。

したがって、和訳を見ると全部入っている。

……君主はどこまでも慈悲深く信義厚く、裏表なく人情味にあふれ、宗教心の篤い人物と思われるように、心を配らなくてはいけない。なかでも最後の気質を身に備えていると思わせるのが、なによりも肝心である… (『君主論』第18章「宗教に『毒』を見る」)

そして、「なかでも最後の気質を身に備えていると思わせるのが、なによりも肝心である」と書いている。最後とは「宗教心」である。五つ挙げて、その中でも最後の「宗教心」を君主たるものは身に備えていなければ、一般の人には認められないと言っているということは、裏を返せば宗教は怖いということである。マキアヴェッリは宗教の怖さを知っているわ

けである。したがって、これは逆を読んで「宗教に『毒』を見る」と考えたわけだが、これは私の考えなので他の人の考えは分からない。

## (2) 信仰と宗教

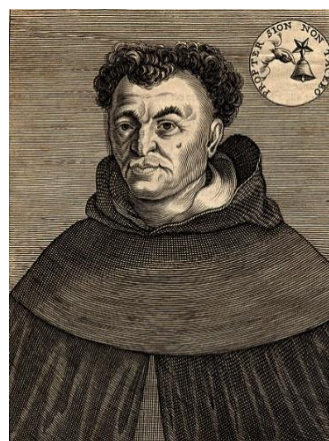
マキアヴェッリは、最後の *religione* 「宗教心」だけを載せている。宗教は絶対に落としてはならないのである。我々が学生たちや院生に宗教について聞くと、彼らは必ず「無宗教だ」と言う。何が何でも「無宗教だ」と言う。しかし、正月に神社仏閣に初詣に行ったり、盆に墓参りに行ったりするのは何かと問うと、首を傾げて「信仰だ」と言う。そこで「信仰と宗教はどう違うのか」と問いかけると黙ってしまう。

信仰は祈りとともに自分の信ずる教説、宗教の教義を信ずることである。私がカトリックであれば、カトリックの教義を信じ、祈ることになる。宗教というのは、それが社会的営為になったもので、宗教団体など「団体」という言葉が付く。信仰も「団体」が付くものがあるが、あまり馴染まない。そのように、今の学生を説得するのは容易ではない。多くの日本人が「無宗教だ」と言う。いずれにしても、マキアヴェッリがいかに宗教というものを恐れていたかということである。

これに関して、私が専門としているカンパネッラは『反マキアヴェッリ主義』という本を書いている。カンパネッラはカトリックのドミニコ会の僧侶のなかでも異端的なカトリック教徒だが、宗教というものを絶対的に信じている。

マキアヴェッリは、前述のように宗教を「should」の世界とし、それから「方途(how to)」の世界を分けているが、さらにもう一步進んで、宗教を社会を動かすための世俗的な方便としている。宗教さえ握っていれば世の中は動く、彼はそこまですべて言っている。つまり、「宗教に『毒』を見る」理由が分かっているわけである。『君主論』ではなくて『ディスコルシ』の方だが、宗教さえ握れば何でもないと本当に書かれていて、もう政治になっている。『君主論』の場合は、まだそれが出てこない。

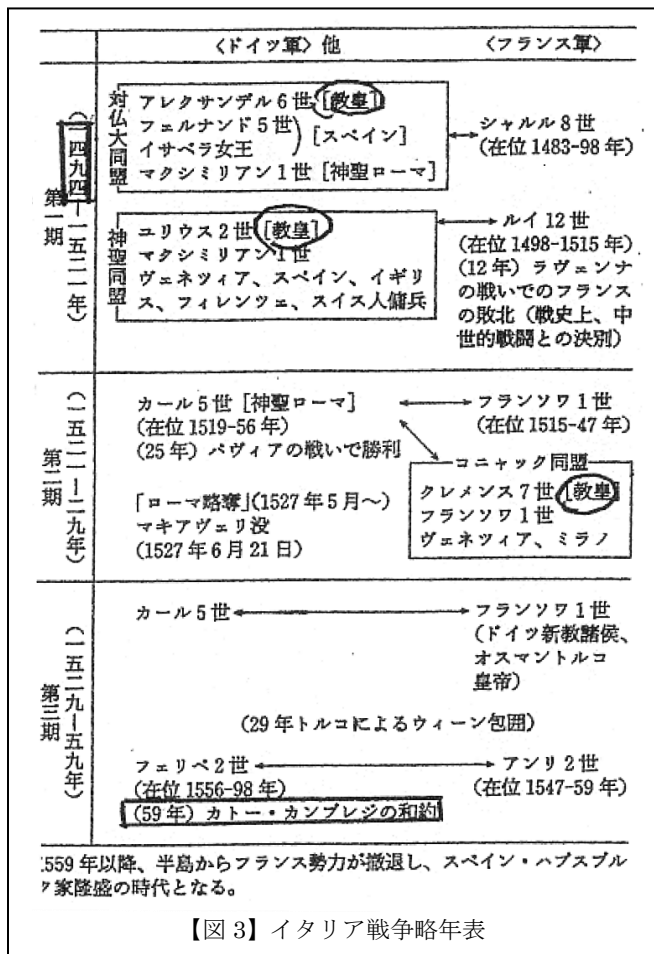
これに対してカンパネッラがマキアヴェッリを批判したのは、カンパネッラが宗教を方便だと思っておらず、生きる糧だと思っているからである。ところが、マキアヴェッリは世俗世界を動かすための方法、道具だと思っている。したがって、マキアヴェッリにとって世の中で一番悪いのは誰かという、ローマ教皇ということになる。ローマ教皇こそこの世の中で一番悪いと言っている。これは『君主論』に出てくる。



トマス・カンパネッラ  
(ニコラ・ド・ラルマサン  
画), Public domain,  
via Wikimedia Commons

## (3) イタリア戦争を通して見るイタリアの歴史

【図3】はイタリア戦争の略年表だが、イタリア戦争の第一期は1494年から始まり、第



出典：澤井繁男著『マキアヴェリ、イタリアを憂う』(講談社)

三期の1559年のカトー・カンブレジの和約まで続き、その間イタリアは焦土と化し、ドイツとフランス、スペインも混ざった争いの場となった。

年表でローマ教皇に○印をつけたが、ローマ教皇の動きを見ると、最初はスペインや神聖ローマと組みながら、すぐにドイツ、イギリス、ヴェネツィアと組むなど、コロコロと変わり、そのようにして世俗の国家を操っている。どの国の君主も首脳も首長も破門されたくないで、ローマ教皇が動く方に就くのである。

その中で一番酷かったローマ教皇はアレクサンデル6世だと、マキアヴェリは『君主論』の中で言っている。この教皇ほど生き方が狡くて酷い教皇はいないとさえ言っている。その息子のチェーザレ・ボルジアは、フランスの王女と結婚し、フランスから軍備的な援助を得て、ローマ教皇の権威を笠に着て乱れていたローマ

マ教皇領を整地する。ところが、1503年にアレクサンデル6世が死んでしまい、チェーザレ・ボルジアは後ろ盾となる権威を失って失脚し、ローマに戻ってしまう。そして、マラリアに侵され、やがてスペインに送られて戦死する。そのマラリアに侵されたチェーザレ・ボルジアをマキアヴェリは見舞いに行っている。

そのように、アレクサンデル6世はコロンブスが新大陸を発見した1492年からローマ教皇になり、1503年に亡くなる。当時のローマ教皇は、寿命から約10年で交替している。アレクサンデル6世も1492年～1503年の足掛け12年間ローマ教皇を務めたことになる。子どもはチェーザレ・ボルジアをはじめとして3人いたが、ローマ教皇に子どもがいるのもおかしな話である。スペインから来た一派で、スペイン語ではボルハと言われる。

当時、マキアヴェリはフィレンツェ共和国第二書記官長だった。第一、第二はほとんど区別がないが、第二書記官長の特徴は戦争担当ということである。

イタリア戦争が始まった1494年がどういう年だったかというと、1453年に英仏百年戦争が終わってフランスが勝ち、それでフランスは軍力を蓄えていく。そして、40年以上

経った 1494 年にシャルル 8 世がアルプス山脈を越えてイタリア半島に攻めて来る。かつて 200 年ほどフランス領だったナポリが、当時はスペイン領となっていたので、それを取り返しに来たのである。

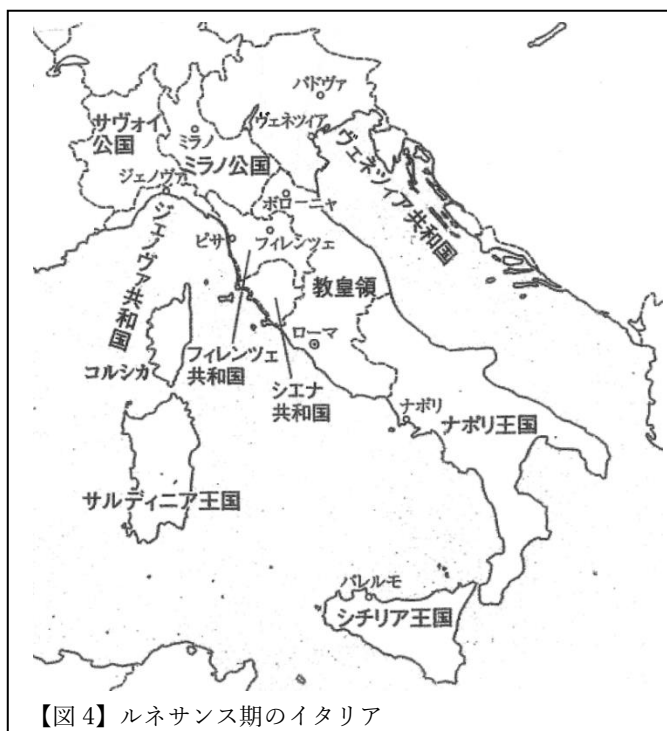
フランスは軍事力を蓄えていたので、イタリア軍より砲身の長い大砲を備え、馬を使ってイタリアに攻めて来た。それに対して、イタリアの軍事力は馬ではなく牛を使い、大砲の砲身も短かった。そのためにどこも手を出すことができなかつたので、シャルル 8 世はアルプスを越えて真っ直ぐナポリまでチョークで線を引いたように攻めて行った。それでこれを「チョーク戦争」と言う。

そのようにしてシャルル 8 世はスペインと戦い、一度は攻め落とすが、挽回されて翌年、這う這うの体でフランスに帰る。それが 1495 年である。

その 40 年前、前述のように 1453 年に英仏百年戦争が終わっているが、この年はもう一つ大事なことがあった。コンスタンティノープル、つまり東ローマ帝国の首府がオスマン帝国によって崩壊したのである。このように 1453 年は、英仏百年戦争が終わり、オスマン帝国が東ローマ帝国を潰した年であるから、東ローマ帝国の土地を全部手にしたオスマン帝国(オスマン・トルコ)が次に攻めるのはどこかという、イタリアだった。

ルネサンス期のイタリアの地図【図 4】を見ると、当時のイタリアは、ミラノ公国、ヴェネツィア共和国、フィレンツェ共和国、教皇領、ナポリ王国の五つに分かれていた。そこにコンスタンティノープルを潰したオスマン・トルコが攻めて来たら、イタリアも潰されてしまう。したがって、イタリアは一枚岩にならなければならなかつた。そこで、1454 年に北イタリアのローディという小都市に五つの国の代表が集まって「ローディの和約」を結ぶ。これでイタリア半島は一つになったのである。

それから 1494 年にシャルル 8 世が攻めて来るまでの 40 年を「イタリアの平和」と言う。この時期にルネサンス文化が花咲くのである。皆さんがご存じのフィレンツェのルネサンス、ナポリのルネサンス、エステ家のルネサンス等、そういうルネサンスの文化が 40 年の間に栄えるわけである。



【図 4】ルネサンス期のイタリア

出典：澤井繁男著『マキアヴェリ、イタリアを憂う』（講談社）

そして、1494年にシャルル8世が攻めて来るが、それに対してメディチ家は何もできなかったために追放される。その後、いろいろあって1498年にマキアヴェッリが何故か登場し、第二書記官から第二書記官長となり、戦争問題で約12年間活躍する。しかし、1512年にメディチ家が帰還してマキアヴェッリは追放されるということになり、『君主論』を書くわけである。

### III 第18章 末尾「目的は手段を正当化する」

#### (1) 翻訳によって作られた言葉

次に、第18章 末尾「目的は手段を正当化する」と題しているが、実はこの言葉は第18章の末尾にはない。ところが、下線部の言葉を拾っていくと「Il fine giustifica i mezzi」という言葉が出来上がるのである—しかしこれもインチキである。

Che abbino la maestà dello stato che li difenda : e nelle azioni di tutti li uomini. e massime de' principi, dove non è iudizio da reclamare, si guarda al fine. Facci dunque uno principe di vincere e mantenere lo stato: e' mezzi saranno sempre iudicati onorevoli e da ciascuno laudati:  
(『君主論』第18章末尾)

イタリア映画の最後に「Fine」と出るが、あれは女性名詞 La fine で「終わり」という意味で、男性名詞の「Il fine」は「目的」という意味である。Il fine「目的」は giustifica「正当化する」英語で言うと justify で、i mezzi は「手段」なので Il fine giustifica i mezzi で「目的は手段を正当化する」となるが、これも下線部を引いた中から拾わなければ出てこないし、正確には出てこない。この言葉の翻訳が「目的のためには手段を選ばず」になり、それがマキアヴェリズムと言われて「権謀術数」という恐ろしい言葉になっているのである。

日本人のマキアヴェッリに対する理解というと、この「目的のためには手段を選ばず」のレベルである。翻訳の恐ろしさはここにある。皆さんは「目的は手段を正当化する」という言葉が良い意味に聞こえるだろうか。まして「権謀術数」と言われると、字を見ただけで毒々しい。

翻訳の恐怖は、その逆を考えてみれば分かる。皆さんは「花鳥風月」がどのように英訳されているかご存知だろうか。我々は「花鳥風月」と聞くと「花」「鳥」「風」「月」という日本の趣の文化を代表するものが浮かぶ。ところが、これが英語では natural beauty になってしまう。「花鳥風月」などどこにも思い浮かばない。だから翻訳は怖いのである。

この「目的は手段を正当化する」のところの文章を拾うと、中頃に fine があるが、al が付いているので男性名詞の「目的」である。それから長い文章が続いて mezzi「手段」がある。そして最後の方に iudicati という単語がある。それも受け身の受動態である。つまり、ここで fine「目的」と mezzi「手段」と saranno giudicati で「正当化されるだろう」となる。

これを未来の受け身をはずして勝手に並べて「Il fine giustifica i mezzi」とした。それに、邦訳では fine「目的」は「結末（結果）」の訳でないを通じない。

イタリア語の 2 行目、si guarda al fine. 以下の下線部を訳してみる。「人は結果（結末）をみてしまう。その君主のとった手段は、立派に評価され、だれからも正当化されるだろう」。以上の下線を Il fine giustifica i mezzi としてしまったのだ。

では、どういう意味でマキアヴェッリはこれらの言葉を用いたかと言うと、「建設的なことを成し遂げるために」という条件が付いている。且つ私利私欲ではなく、公のものを成し遂げるためには、目的のために手段を選ばなくてもよいという条件が付いているのである。その条件の例として、ローマ建国の祖であるロムルス（Romulus）の例を挙げて「彼はローマを統一しなければならなかったので、このようなことをしたのであって、私利私欲のためではなく、公のためにやったのだ」と『ディスコルシ』の中で書いている。

したがって、『君主論』のこの部分だけを取り出して「目的のためには手段を選ばず」という凄惨な翻訳をしてしまったのは日本人の罪である。誰がこのように翻訳したのかは分からないが、とても拙い。原文は未来形の受動態で書かれているので、「目的を遂げるためにはいろいろな手段があるでしょう」くらいがよいと思うが、それを現在形で書いてしまったのである。

そのように翻訳というのは怖いものである。先ほども触れたように、菅総理大臣はマキアヴェッリを好まれているようだが、まず本当の意味を理解されていないと思う。「目的のためには手段を選ばず」に総理になった人なので、これで行なったのではないか。もちろん、本人に聞いてみなければ分からないので、野党の誰かに手紙を書いて、予算委員会で「貴方は本当に『君主論』を読んだのか」と質問してもらおうとよいかもしれない。しかし、読んだとしても翻訳で読んでいるにちがいない。第 18 章の末尾を、一部を勝手に組み合わせる翻訳してしまった翻訳文化の罪である。

つまり、この言葉は公で建設的なものに使うのはよい。そして、公で建設的なことを考えられる人は自律していなければならない。つまり、「目的のためには～」と組み合わせられた言葉は訳語がどうであれ、自律した人物である時に初めてその人の性格を表すものとして用いられるという風に解釈するのが、マキアヴェッリにとって最もふさわしいのではないかと私は思っている。皆さんがどう思われるかは別だが、私は自律性が重要だと思う。

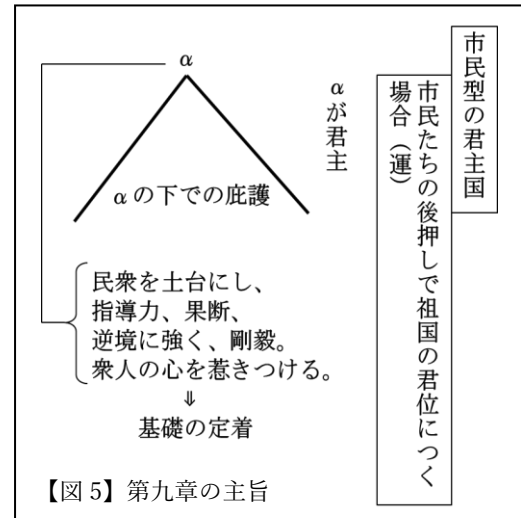
#### IV 第 9 章 後半「市民型の君主国」

最後は、第 9 章後半の「市民型の君主国」だが、【図 5】を見ていただきたい。マキアヴェッリはこの第 9 章で、どのような君主国が一番良いかという『君主論』についての主張をしているので、第 9 章が一番大切である。他にも面白い章があるので、読まれると「こんな



ことも言っている」といろいろなご意見があると思うが、マキアヴェッリはどのような統治の国をつくるかという意味で『君主論』を書いているので、この章が最も重要だと言える。

マキアヴェッリは共和主義者なので、どうしても市民から離れられない。そのために「市民型の君主制」として、【図5】の第9章の主旨の図解のトップに $\alpha$ として「君主」を置き、その君主に判断力があって、理性があって、寛容であるならば、こういう形なら許されるということを書いている。献呈先がメディチ家なのでそういうことを書いて、第9章の後半が終わる。



出典：澤井繁男 著  
『マキアヴェッリ、イタリアを憂う』（講談社）

Ma, sendo uno principe che vi fondi su, che possa comandare e sia uomo di core, né si sbigottisca nelle avversità, e non manchi delle altre preparazioni, e tenga con l'animo et ordini sua animato l'universale, mai si troverà ingannato da lui, e li parrà avere fatto li sua fundamenti buoni.  
(『君主論』第9章後半)

ここで一番難しいのは l'universale の解釈である。sua animato l'universale の l は冠詞で男性名詞に付く Il だが、universale は「万能的な」という形容詞であり、例えば、レオナルド・ダ・ヴィンチのような人物を万能人=uomo universale と言う。つまり、これは形容詞に冠詞が付いているわけであり、これは何かということになる。そして、その前に「貴方が愛されている」「貴方が愛している」という意味で amare という単語があり、「万能人」が出てくる。これは難しいが、我慢して読んでいくとその先に lui 「彼」という単語が出てくる。つまり、これは人であるから l'universale は万能人ではなく、一般的な「人」を指す。一般の人、すなわち自分が愛している人たち、愛されている人たちを指すことが lui まで読むと分かる。英語も難しいが、イタリア語は主語がないのでより面倒である。この場合は uomo universale が lui まで来ないと分からない。

そこで、日本語訳を読んでもみると、上手く訳している。英語も上手くごまかしている。

……君主が民衆の上に土台を置き、しかも指導力があり、果断な人であって、逆境にあつてあわてふためくことなく、準備万端おきたらずに、その剛毅さと適切な措置によって衆人の心を惹きつけていれば、けっして民衆に欺かれることはないはずである。きつと確固たる土台が持てたと見えて来ることだろう… (『君主論』第9章後半「市民型の君主国」)

ここでは一般の人を「衆人」と訳し、amare を「惹きつける」と訳している。それで「惹

きつけていれば」と「～れば」があるので「もし」という単語が必要になるが、それがない。その先が「見えて来ることだろう」で終わっているので、「～れば」になっているが、それに相当する「もし」という言葉は原文のイタリア語にはない。ない単語を補っていかに翻訳するか苦労している。そのため、英訳には if があると思うが、ここでは he will be found になっている。本当はイタリア語の直訳は will be ではなくて would be である。

このように「市民型の君主国」というのが、マキアヴェッリが推奨し、メディチ家に一番主張したかったものである。トップの  $\alpha$  に立つ者が絶対君主であっても、貴族であっても、その下の市民を保護してくれるなら誰でもよいという折衷案を出さざるを得なかった。それを「市民型の君主国」と我々は位置付けているわけである。

## 質疑応答

- Q1 マキアヴェッリの「目的」とはイタリアを守ることか
- Q2 people を「民衆」と訳したのはなぜか
- Q3 「市民型の君主国」はイタリアで実現されたのか
- Q4 当時のイタリア語と現代イタリア語に違いはあるのか
- Q5 『君主論』はリーダーシップ論として読むことができるか
- Q6 「運」と「運命」の解釈は違うのか
- Q7 教育において人間形成という観点からどのような展開が望ましいか
- Q8 ニッコロ・マキアヴェッリとジョヴァンニ・ボテロはどのように比較されるか
- Q9 経済力に重きを置いた場合、どのような視点で学べばよいのか
- Q10 今後どのような時代の変革が起きると予測されるか

### Q1 マキアヴェッリの「目的」とはイタリアを守ることか

「目的は手段を正当化する」ということについて、「目的」が何かはこの中で触れられていない。先生の著作に『マキアヴェリ、イタリアを憂う』という本があるが、それを読むと、当時のイタリアは大国に囲まれて、そこからどのようにフィレンツェ、イタリアを守るかということが前提になっているのではないかと思った。「目的」とはそれではないかと思うが、どうなのか。

(澤井)

マキアヴェッリの夢はイタリアの統一だった。つまり、マキアヴェッリは古代ローマを尊重する人文主義者であるから、彼の根拠たる思想はイタリア半島の統一である。したがって、今言われた「目的」の中に統一、小さく言えばフィレンツェ共和国だが、彼はそれを超えて半島の統一を夢見ていた。ある意味では現実主義者だと思われがちだが、ユートピアを求めていた。したがって、今の考えは正しいと思う。

### Q2 people を「民衆」と訳したのはなぜか

最後の「市民型の君主国」のところで、英語の people が日本語訳では「民衆」となっているが、なぜ citizen という単語を使わなかったのか。民衆の定義が分からないが、マキアヴェッリはどのように考えていたのか。どのような変遷で日本語訳は「民衆」になったのか。

(澤井)

People は people と peoples と the people で意味が違う。この英訳は the people である。peoples の時は「人民」で、the people は「民衆」という意味になる。したがって、これはイタリア語を読んだ英訳者が「民衆」と理解したのだと思う。だから2ヶ所とも the が付いている。

people の訳はリンカーンの有名な演説があるが、あれも of the people, by the people, for the peoples と the が付いている。それを日本語では「人民」と訳しているが、英和辞典を引くと people ほど難しい単語はないと分かると思う。是非、英和辞典を引いて確認していただきたい。私は予備校の講師をしていたので、これを試験問題でよく出題したものである。

### Q3 「市民型の君主国」はイタリアで実現されたのか

「市民型の君主国」がマキアヴェッリの思い描いた形だと言われたが、その後、イタリア国内でこれに近いものが歴史的に実現されたことがあったのか。

(澤井)

実現されていない。もし挙げるとすれば、ヴェネツィア共和国である。ただし、ヴェネツィア共和国は共和国と名乗っているが、貴族制である。その貴族をヴェネツィア共和国では「市民」と呼ぶ場合もあるので、もし挙げるとすればヴェネツィア共和国になる。ミラノは公国であり、フィレンツェはいろいろと変遷し、ナポリは当時スペイン領下で副王が支配していたので、そういう制度はない。

### Q4 当時のイタリア語と現代イタリア語に違いはあるのか

私はイタリア語が全く分からないが、これは 500 年前のイタリア語で、日本で言えば室町時代の中世の文章を読むようなところがある。現代イタリア語と当時のイタリア語はかなり違うのだろうか。

(澤井)

中世フランス語や中世英語と言うのはあるが、中世イタリア語というのではない。そのため、大学でイタリア語を学んで 3 年生か 4 年生になるとダンテの『神曲』を読むことができる。ただし、言葉が微妙に違っていて擬古文的である。擬古文ではない。したがって、『神曲』も浄罪界や天国は思想的に難しく読めないが、地獄は描写だけなので読める。

マキアヴェッリはダンテよりも後の世の人だが、彼は屈折した人なので、イタリア語まで屈折している。ただし、先ほど紹介されたカンパネッラのイタリア語は読める。しかし、詩の場合はとてつもなく難しい。

### Q5 『君主論』はリーダーシップ論として読むことができるか

私は専門が心理学だが、心理学ではリーダーシップ論が盛んである。企業の方がリーダーシップをどのように発揮するかということで研修会等も開かれている。この『君主論』をリーダーシップ論として読むことはできるのか。

(澤井)

それは可能である。むしろ、日本ではそれで読まれることが多いと思う。

(質問者)

菅総理もリーダーシップ論として読んでいるということか。

(澤井)

多分、それに自分を被せていると思うが、かなり勘違いしている。

(質問者)

リーダーと言うと、キリストも強力なリーダーだと思う。他にも、シーザーやスキピオ、ハンニバル等のリーダーがいるが、マキアヴェッリはむしろそういうローマのリーダーの方にアイデンティファイしているように感じられる。そのように読み取ってよいだろうか。

(澤井)

これは大変重要な質問で、本日はこの話をしなかったが、ルネサンスというと普通はギリシャ、ローマの復活が言われる。本当は「再生」が正しいが、ギリシャ・ローマの時代はキリスト教ではなく、異教の文化、非キリスト教である。ヘレニズム、地中海の文化で、それが翻訳によってラテン語に甦る。それを人文主義と言い、イタリア語で *umanesimo*、英語で *humanism* と言うが、*humanism* を日本人は「博愛主義」とか「人道主義」と解釈している。それは *humanitarianism* であり、本当の *humanism* は英和辞典を引くと「人文主義」と書かれている。

「人文主義」とは何かというと、マキアヴェッリもその中の一人だが、異教の古典、古代の文献を読むことによって人格を形成しようとして生きる姿勢を言う。「主義」と書かれているが、姿勢、態度である。したがって、マキアヴェッリの生き方の中に今言われたシーザーたちの生き方が反映しているのは、キリスト教よりも多いと思う。

(質問者)

そちらの方に親和性を感じるような記述を見つけたので、そう解釈した。

(澤井)

ペトラルカをご存じだろうか。ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョと並び称せられるが、ペトラルカは自分の立ち位置を決めようとした歴史意識を発見した人で、非常に重要な人物である。日本では高校の教科書にダンテの『神曲』とボッカッチョの『デカメロン』しか出ておらず、ペトラルカは出てこない。(2023年度の高校の世界史の教科書で初めて本文に登場する) ペトラルカの研究は20年前くらいからようやく日本でも盛んになって、岩波文庫に書籍が3冊あるが、ダンテとボッカッチョは和訳があるのに対して、ペトラルカの研究は遅れている。

しかし、ペトラルカこそが自分の今いる位置を現代と定め、古典古代の西ローマ帝国が滅びる476年以前を黄金時代と見た。そして、今を生きる自分と、476年以前の黄金期、その真ん中の時代を中世と名づけて暗黒とした。中世暗黒説はペトラルカが作ったのである。

ペトラルカは、そのようにして自分の立ち位置を決め、そして、法律のメッカであるボローニャ大学でローマ法を学び、キケロやセネカの中に正統的なラテン語の文章を見出す。ラテン語の歴史は、中世で乱れて中世ラテン語というものが出てくるが、それを越えてペトラルカはキケロやセネカの中に正しい正統ラテン語を見つけ、それを真似て人格形成をしていく。そのため、キケロやセネカの非キリスト教の人文主義で、人格形成をしていく現世尊

重の思想がペトラルカの中に入るが、ペトラルカは敬虔なキリスト教徒だったので、両者を調和させてキリスト教人文主義が成立する。これがルネサンスの中で流れ続け、マキアヴェッリもこの中の一人になる。

もう少し具体的に言うと、ルターの宗教改革は、そのように異教のヘレニズムの血に染まったキリスト教人文主義者の人文主義というヘレニズムの血を洗い流して、キリスト教に戻そうとする運動である。

したがって、古代のリーダーをマキアヴェッリが尊重したというのは卓見だと思う。

#### (質問者)

『君主論』はマキアヴェリズムしか知らなかったのですが、改めて見るとリーダーシップ論としても面白いと思って読ませていただいた。

#### (澤井)

今述べたペトラルカは、日本では紹介されるのが遅れ過ぎたために、今でもダンテがルネサンスの始まりと言われているが、ダンテは中世の幕を閉じた人である。ペトラルカからルネサンスが始まり、ボッカッチョの『デカメロン』と続く。そのペトラルカからキリスト教人文主義が始まるが、逆を言えばキリスト教は人文主義で補われなければキリスト教自体が弱くなっていたという証拠である。

### Q6 「運」と「運命」の解釈は違うのか

先生の本では「運」と「運命」は日本では違う解釈をされているように思うが、イタリアではどうなのか。例えば、日本では「運がいい」「悪い」と言うが、それと「運命的に」というのはニュアンスが違うと思う。例えば、チェーザレ・ボルジアは、親が教皇だったので軍事的に上手くいっていたが、教皇が死ぬと自分も病気になってしまった。それは運命なのか、運なのかと単純に考えた場合、どうなのか。

#### (澤井)

fortuna を「運」や「運命」と訳すが、それは日本語の問題だと思う。「お前は運がない」と言う時と「それはお前の運命だ」と言う時はニュアンスが違う。したがって、チェーザレ・ボルジアの場合は、運がなかったと言えばそうだが、父親の教皇の死によって彼が背負っていた運命が崩れたという場合は運命だと言える。

これは非常に難しい話で、「運命」が出てきたら必ず *virtù* = 英語の *virtue* が出てくる。これは「力量」で力、器、勇ましい武道の意味もあり、その「力量」と「運命」をつなぐものに「チャンス」*opportunità* がある。この「チャンス」を持っていない人は「力量」があっても「運命」を引き寄せられない。「チャンス」に見放されたら「力量」があっても「運命」に見放される。このように三つの要素があり、マキアヴェッリの『君主論』の第2章と第4章には片方ずつしか出てこないが、「力量」と「運命」があれば、その間に「機会(チャンス)」が連鎖している。

寓意になるが、「運命」の女神は髪を後ろに垂らしているが、「チャンス」の女神は髪を前に垂らしている。そのため「チャンス」の女神が通り過ぎた時は髪のない後ろ姿しか見えない

いので掴むことができない。マキアヴェッリに『機会について』という詩があり、そのように歌っている。しかし、「運命」の女神は髪を後ろに垂らしているので掴まえられる。だから、「チャンス」を掴まえる方が難しいと言っている。「チャンス」の女神は通り過ぎたら掴まられないという怖い詩である。そして、「チャンス」を掴むためには「力量」と「運命」が備わっていなければならない。「力量」と「運命」を結ぶのが「チャンス」であり、この三つが揃わなければならないのである。ところが、普通、マキアヴェッリの授業では「チャンス」を教えない。それは『機会について』という詩を読んでいないからである。マキアヴェッリには怖い詩が四つほどあるが、その中の一つである。

### Q7 教育において人間形成という観点からどのような展開が望ましいか

人間形成という観点から、日本の教育の現場も人格形成、あるいは広く人間形成などは課題として強く意識されていると思うが、その方途、縁をどこに求めてそういうことを具現化していけばよいかというところがあるように思う。

我々も高校生を対象にしたジュニアセミナー等を行い、そういうテーマを掲げているが、どのようにそれを展開していけば良いかということが縁をもって論じられ難い。先ほど人文主義等も絡めて話があったので、伺いたい。

(澤井)

ヨーロッパの場合は、ギリシャ・ローマの古典を読むことである。我々がギリシャ・ローマと言うのは、ギリシャ文明の方がローマ文明よりも早いからだが、かつてイタリア半島では誰もギリシャ語を読めなかった。ただし、ラテン語は読めた。ラテン語の方言がイタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語なので、ラテン語は読めて話し言葉はイタリア語だった。しかし、ギリシャ語は誰も読めなかったので、東ローマ帝国からマヌエル・クリュソロラスというギリシャ語の大家を連れて来て、1397年にフィレンツェ大学にギリシャ語の講座を作った。それでやっと知識人がギリシャ語の文献を読めるようになった。

つまり、ギリシャ・ローマとは文明の早い遅いで順番に言っているが、そのようにイタリア人は南イタリアの一部の人たちがギリシャ語を読むことができただけで、北イタリアのフィレンツェやミラノやヴェネツィアの人たちはギリシャ語を全く読むことができなかった。先生を連れて来て一から学習したのである。

それでギリシャ語が読めるようになると、プラトンやそういうものがやっと翻訳された。それが前述のイタリアの平和の時代であり、その時に初めてイタリア人はプラトンを知った。それが15～16世紀のイタリア・ルネサンスである。

12世紀ルネサンスというのを聞かれたことがあると思うが、アラビア民族がギリシャを占領した際、アラビアの人たちは実証的な民族だったので、ギリシャ文献の中で実証的なギリシャ哲学であるアリストテレスの哲学を12世紀までにアラビア語に訳した。そうする中で、11世紀末の1096年に十字軍が始まると、エルサレムまで行くので道路や海路を整備しなければならなくなり、イタリアの人たちはアラビア語を一生懸命に学んだ。そこからアラ

ビア語に訳されたアリストテレスや他の偉人たちの書をラテン語に訳すことになる。これでアリストテレスの哲学が、それぞれ分野は違うがイタリア半島、スペイン、ヴェネツィア、プロヴァンスに入っていく。このアリストテレスの哲学を土台にして、その上にキリスト教神学を作ったのがトマス・アキナスである。

したがって、アリストテレスの哲学が12世紀に入って来て、12世紀に生まれたトマス・アキナスが13世紀にキリスト教神学を作り、それがパリ大学でスコラ神学として成立する。しかし、そのアリストテレスはギリシャ語からアラビア語へ、アラビア語からラテン語に訳された二重の訳になっている。12世紀に直接アラビア語の原典も入って来て、錬金術や光学等がヨーロッパに入ってくる。これが12世紀ルネサンスである。

一方、15～16世紀のイタリア・ルネサンスは、ギリシャ人を招いてギリシャ語を学び、プラトンを訳しており、12世紀ルネサンスとこの15～16世紀のイタリア・ルネサンスを通して、初めて西洋は文明の地となる。それ以前は、西方の辺境の地と言われていた。つまり、ルネサンスも翻訳文化であり、そのプラトンを訳した人がマウリシオ・フィチーノである。彼はプラトン著作集をすべてラテン語に訳したので、彼がいなければイタリア人もヨーロッパの人もプラトンを知るすべがなかった。

このように、アリストテレスが12世紀に、プラトンが15～16世紀に訳され、やっとヨーロッパが知的に整ったのである。その恩恵を受けるのが、その後のマキアヴェッリやカンパネッラの世代になる。プラトンを訳した時にヘレニズムの文化が入り、新プラトン主義が入って来る。この新プラトン主義の影響は根強く、一世を風靡して異教の文化をつくっていく。このようにして250年が流れていく。

つまり、学校教育で学生にいかにして文化が成り立っていくかを伝える時に、明治維新の時に福沢諭吉や西周がいかに努力して「自由」「恋愛」「社会」という言葉を作ったかを知ると同じように、言葉からまず出発して文化の醸成を考えるのが一つの手だと思っている。

今はソーシャルディスタンス=社会的距離などともない訳があるが、あれは違う。ソーシャルディスタンスは社会学の用語であり、静的な距離で動きはない。したがって、ソーシャルディスタンスングであり、あの場合のソーシャルは「社会」という意味ではなく、「社交」の意味である。人と人との交わりが動くことなので、人と人との間を保つことになる。報道では社会的距離という意味で通っているが、あれは間違いである。ソーシャルディスタンスという音が良いので、使ってしまったが、それはやはり少し考えなければならないと思う。

文化は言葉から発生するので、英語やいろいろな国の言葉を安易に受け入れることは危険である。したがって、できる限り私の授業はそういうところを心掛けて行っているつもりだが、学生諸君はどう思っているか分からない。

#### Q8 ニッコロ・マキアヴェッリとジョヴァンニ・ボテロはどのように比較されるか

ニッコロ・マキアヴェッリ、ジョヴァンニ・ボテロの対比をされていたと思うが、ご説明いただきたい。



(澤井)

ボテロの代表作は『都市盛衰原因論』で、都市国家がどのように隆盛したり、消滅したりするかを的確に論じたとても面白い本である。ボテロはイエズス会士で、マキアヴェッリよりもかなり後に生まれ、経済に目を付けた人である。国家あるいはその地域が経済でどのように盛衰を繰り返すかということに着目して書いたのが『都市盛衰原因論』である。だから、とても面白いし、日本も出てくる。

一方、マキアヴェッリが基としたのは軍備、武力である。マキアヴェッリは武力を持てば国が興ると考えて、フィレンツェで市民軍をつくる。フィレンツェの弱いところは傭兵頼みだったことであり、傭兵にいつも裏切られていた。マキアヴェッリはそれを後悔して、徴兵制を布いてまちの与太者を集めて市民軍をつくったのである。その軍隊によって、チョーク戦争で独立したピサという港を乗っ取り、ピサ奪還を成功させた。1506年のことだが、10年かけて成し遂げている。

マキアヴェッリの作品の中に『君主論』『ディスコルシ』と並んで『戦争の技術』という本がある。軍事論の中に軍備の大切さを書いて、ローマ軍がいかに強かったかを示し、ローマの連隊の組み合わせや軍旗を持つ人の大切さ、大砲を打つと目的地を通り過ぎて落下し煙だけが上がって敵が見えなくなった等々が綴られ、読んでいると少年時代の戦争ごっこを思い出してワクワクして読めるのが『戦争の技術』という本である。翻訳も出ている。

これに対して、ボテロは経済生活に重きを置いて『都市盛衰原因論』を書いた。それを私は金澤大学教授の石黒盛久氏に頼んで訳してもらった。とても面白い本で、当時はこのような人がいたのかと思う。マキアヴェッリがあまりにも注目されているが、このようにボテロは経済に主眼を置き、マキアヴェッリは軍備に重きを置いた。確か、2人は60年ほど時代が違うと思う。



ジョヴァンニ・ボテロ肖像  
/ Public domain,  
via Wikimedia Commons

## Q9 経済力に重きを置いた場合、どのような視点で学べばよいのか

ルネサンスを学ぶ重要さもお話を聴いて感じるところがあるが、ボテロとマキアヴェッリの対比から現在の国家の力の行使の仕方を見ると、今はかなり経済力に重きを置いているようである。どのような視点で学んでいけば良いのか。

(澤井)

コロナ感染によって経済力が衰え、そこからまた経済の復興が起こるといふ、そこに目を付けたボテロは当時としては大したものだと思う。軍備で復興を目指すと北朝鮮のようになってしまっただろうもない。北朝鮮だって経済力が欲しいに決まっている。ロシアもそうである。日本はこのように我々が今いる世界で何とかやっているが、そういう意味で、ボテロの時代では軍備が考えられなくなっていた。

ボテロには『Relazione Universale(世界報告)』という本もあるが、当時は大航海時代なので、その中で彼はいろいろな資料を持って来て『都市盛衰原因論』を書き、さらに『世界報告』という画期的な本も書いている。そのように経済を主眼とし、新大陸も見据えて書いた本が16世紀にやっと出て来たというのは重要なことであり、以後、カンパネッラの時代もそうだが、軍備ではなく、さらにキリスト教もだめになっていたため、経済の時代に入り、やがてガリレイが出てくる科学革命の時代になる。同時に科学革命とは表裏で魔女狩りがあるので、そういう暗い面と科学革命という明るい面が同時に進行して、やがてガリレイの時代に入って行くわけである。そのため、ルネサンスを学ぶ際、私の授業では全15回の最後が「科学革命と魔女狩り」となっている。魔女狩りは宗教の問題や女性問題が絡むので難しい。

科学革命も西洋の15～16世紀にしか出現しなかった画期的な世界観である。科学革命を最も的確に表しているのは、ガリレイの「自然という書物は数学の言葉で書かれている」という言葉である。数学の言葉で自然が書かれているということは、自然を方程式で表すことができるということである。方程式は量の世界であり、量の世界が尊重されて今に至っている。その一方で忘れ去られたのは、カンパネッラたちが唱えた質の世界である。量と質の世界があって、質の世界が消えたところでガリレイが出てくる。ガリレイは質の世界を否定して出てくるのである。

カンパネッラはガリレイと友人だったが、彼は質の世界の人だったので、ガリレイの地動説を受け入れられなかった。ガリレイは自身が唱えた地球の自転を慣性の法則できちんと述べるが、カンパネッラはそこを理解できずに「神の意志で地球は動いている」と言っている。ガリレイの友だちでありながら、ガリレイの思想を半分は受け入れても、半分は受け入れられずにカンパネッラは生涯を終えた。

つまり、カンパネッラは、ガリレイとカンパネッラの前の世界の両方を受け継いだ中間的な世界に生きていた人である。先ほどの詩を読むと「この人は近代化されなかった人だ」と分かるし、気の毒だとも思うが、それが現在の質の世界が見失われているこの環境破壊とエコロジーの世の中でどうなのかが別の問題として想起される。

#### Q10 今後どのような時代の変革が起きると予測されるか

科学の話が出てきたが、現在、科学に行き詰まりが出てきていると思う。量子力学が出て来て、宗教やいろいろなものがすべて融合する時代になっているように感じるが、改めてルネサンスの時代において時代の変革を受け入れられなかった人たちと同じような変化が、今この世界でも起きているように思う。今後の日本のあり方について、どのような考えをお持ちなのか、教えていただきたい。

(澤井)

私は『カンパネッラの企て』という570枚からなる本を書いた。カンパネッラは「自然魔術師」と言われているが、その場合の魔術は「探求」という意味であり、自然をありのままに見つめるのがカンパネッラである。ありのままに見つめて即物的だが、自然を質と考える

ので自然の中に霊魂を見ようとする。そのため、多神教になって、一神教のキリスト教から排除される。ガリレイは量と見るのでキリスト教的である。キリスト教の聖書の創世記の第1章の第26節には、人間は自然の動物や植物を管理するように創られていると書いてある。管理するということは即物的に支配することであり、自然支配を人間は許されており、聖書の存在がなければ科学革命はない。

前述のように、カンパネッラは自然魔術師と言われるが、私は『カンパネッラの企て』の中で「科学魔術師ではないか」と書き、それを結びの言葉とした。私はアナログ人間で、PowerPointを使うのも嫌で大学でも板書をしているが、そういう私は、科学の時代に生まれたけれどもAIも何もできずに生涯を終えるのではないかというのが結論であり、それをカンパネッラと重ねた。情けない話だが、この歳になったらそれでよいと思っている。

#### (質問者)

日本は一神教ではなく、八百万の神々が支配していて物にも魂が宿るという考え方がある。「お天道様が見ている」など、生まれた時から多神教の中で育っているので、日本はとても多様で受け入れる要領があると思う。一番足りないのは発信する能力だと思うが、今若い人たちが日本の『古事記』や言霊を話題にし始めて、言霊でいろいろなことをやろうとか、書道と結びつけるとか、YouTubeでもいろいろなことをしている。そういうものを見ると、日本も捨てたものではないと思うが、どう思われるか。

#### (澤井)

私もそういう科学魔術師のファンである。言われることは分かる。人間は絶対に四角四面に生きられない。日本の文化の多様性は若い人たちやいろいろな人たちを包み込むかもしれないし、上手いものを創造するかもしれない。これからの問題で、これからの人が中心になって考えてほしいと思う。

発行日	2023年11月30日
講演著者	澤井 繁男
編集発行	公益財団法人 国際高等研究所 <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ 大仲佐代子

ISSN 2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲート」の胸像  
(国際高等研究所庭園)